

原著<文>

コミュニケーションを意識した命名に関する予備調査：非基本色を用いて

片山 伸子*1 小川 徳子*2

1. 問題

私たち人間は言語の違いはあれ、ことばを用いて世の中のさまざまな事象を名づけ、名づけたことばを使ってコミュニケーションを行っている。またある語にはそれが示す範囲があり、語で世界をカテゴリ化しているといえる。カテゴリ化(categorization)や概念(concept)と語(word)は切り離せない関係にある。語彙獲得において、音を学ぶだけでは十分とはいえない。語が示すカテゴリを学ぶ必要がある(今井・針生, 2014)。「いぬ」ということばを学ぶことは、「犬」が適用される事物とそうでない事物を分けることを学び、「犬」カテゴリが形成されることだともいえる。また、ある語が示す意味範囲は言語によって異なる。今井(1993)は、第二言語習得の場において、母語の持つ意味範囲を外国語の判断にも当てはめる傾向があり、それが外国語の語い学習を難しくすると指摘している。

ある語が示す意味範囲は言語の違いによって異なるが、同じ言語でもある語が何を示すのか、またある事物をどのように表現するのかは発達の、また状況に応じて変化する。ことばを覚え始めた乳幼児には、しばしば「過限定(限定した対象にしか覚えた語を使わない)」や「過拡張(対象を広げて語を使う)」がみられる。成人でも「肉」で牛肉を思い浮かべる人(主に関西地方に多い)と豚肉を思い浮かべる人(主に関東地方に多い)がいるように、語とそれが示す意味範囲や示す事物は常に同じではない。

同じ事物に別の名前がつけられることもある。別の名前がつけられる時には、その場の状況に合わせて、事物から属性をとり出し新しい意味範囲が作られている。同じ入れ物も保存することを強調したければ「保存容器」と呼び、フタが密閉するという属性をもつものに限定されるかもしれず、単に入れ物なら「ジャー」や「容器」と呼び、フタのありなしは属性として重要にならないこともあるだろう。語と概念は一定ではなく、さまざまな要因によって変化すると思われる。

*1 名古屋柳城女子大学

*2 立命館大学

人工的に作られる商品名は、状況による命名の変化がよく表れた例であろう。簗川(2006)は戦後家庭に急速に普及した冷蔵庫、テレビ、洗濯機の商品名の変遷を1946年から2000年までを対象に調べ、命名メカニズムを明らかにしている。商品名の中に含まれる機能名(テレビなら「カラー」や「ハイビジョン仕様」)に注目すると、機能名が示す機能が一般化するとその機能名が消える(カラーテレビが普及すると「カラー」という機能名が商品名から消える)という現象が認められるなど、一定のメカニズムがあることが示された。これは、「カラーテレビ」という命名で「カラー」と「そうでない」テレビという2つのカテゴリが作られていたものが、カラーテレビの普及と共に2つのカテゴリを作る意味がなくなり、「テレビ」という命名だけで「カラー」を含めるようになったと言えるだろう。また、木俣・野々村・大澤(2007)は、子ども達に自然に親しみ植物への関心を高める実践として、自分たちで草を探し命名する「植物めいめい」プログラムを実施している。名前を分析すると、形態のみならず植物から受けた感覚も使い、自由な命名を行っていることがわかった。言語には元々ある語を覚え、正しい使い方を習得する面だけでなく、場や人とのかわりによって変化し、語が示す意味の範囲も場や人によって変化すると考えられる。

2. 本研究の目的

状況に応じた語や意味の変化は、概念の凝集性や階層を問題にしている従来の概念研究では十分に扱われてこなかった。これまでは我々は、新奇事物を元にコミュニケーション場面(2人で話し合って分類する)での分類基準の変化などを検討してきた(片山・小川, 2016; 片山・小川, 2018; 片山・小川, 2019)。この研究をすすめ、コミュニケーション場面が命名や概念形成に与える影響を明らかにし、他者との共有文脈から発生する命名行為について検討していきたい。

概念研究では、刺激として事物を用いる場合、写真やイラストを使用することが多い。上記の我々の研究では、事物を分類や命名を行う際、触感や質感も大切だと考え、3次元の新奇物を用いてきた。結果からは、実際に質感などの分類基準が使われていた(片山・小川, 2016)。一方で、片山・小川(2016)で使用した刺激は色や形の属性がさまざまであり、適切な刺激を作成することが課題としてあげられた。片山・小川(2018)では、動物に似せた新しい刺激を作成し、分類や命名の特徴を調べている。刺激検討の1つの試みとして、色を見せて色名をつける(命名する)行為を取り上げたい。

今回対象とする色は、可視光の波長の変化からなる連続体だが、「赤」や「青」といっ

た色名をつけ、カテゴリとして認識されるものである。色のカテゴリに関しては、言語によって色名を示す語の数やその色名が示す色の範囲が異なることが知られている。また、どの言語にも数は異なるが基本色彩語(basic color terms)が存在する。日本においては小野・堀内・富永(2010)は、美術系大学生を対象に想起した色名を列挙させたところ、基本色名(白・黒・赤・緑・黄色・青・茶・紫・ピンク・オレンジ・灰色)と共に「黄緑」が基本色名と同程度産出されたと報告している

また、言語音のカテゴリ化知覚(林, 2006)が生後1年間で成立することと比較すると、色名とそれが示す色カテゴリの学習はゆっくり進む。Roberson, Davidoff, Davies, & Shapiro(2004)は、異なる2つの文化圏に住む子どもたちの色名の発達を3、4歳から縦断的に3年間調べ、基本色名の数も色名が示す色の範囲も異なるが、その言語の色名を獲得していくことを示した。

コミュニケーション(伝達)を意識することが命名に及ぼす影響について、色を刺激材料として分析をするためには、さまざまな色名が産出されることが必要であり、基本色名ではなく中間色がふさわしい。また、人によって全く異なった認識がなされてしまうような色も伝達という観点を考えればふさわしくない。片山・小川(2020)では、中間色を多く含む色鉛筆「色辞典」(トンボ社製 1988年発売)から、緑色系の13色を選び、色につけられた色名から色を選択させ、ある程度の共通性がみられるのか検討した。その結果、色鉛筆製作者側がつけた色名と色を正しく結びつけた(製作者側が意図した色を色名から想起した者)色もあったが、そうではない色もあった。色の選び方は全くの個別性があるというわけではなく、ある程度の共通性があった。結果を踏まえ、片山・小川(2020)で使用した13色を命名を行う予備実験でも使用し、結果を片山・小川(2020)と比較して刺激の妥当性や実験手続きを検討することとした。

予備実験1では、非基本色の色カード13枚に対して色名を自由につけさせた。美術の専門家ではない一般の成人が微妙な中間色に対する命名が可能か調べ、命名の特徴を検討した。

3. 予備実験1

参加者 保育者養成校に通学している女子短大生6人が参加した。保育者養成課程のカリキュラムとして美術科目を受講しているが、美術の専門教育は受けていない。日常生活を送ることに問題がない色覚を有していた。片山・小川(2020)の参加者と重複していない。

刺激 片山・小川(2020)で使用したトンボ株式会社製『色辞典』から緑色系の色鉛筆 13色を使用した。色カード(図 1)と色カードを置き、下に色名を記入する欄が設けられた調査用紙を用意した。

手続き 同意書を提示し実験に対して同意を得た後、13 枚のカードを手渡し好きな順番に並べるよう教示した。次に、各色に好きな名前をつけるよう教示し名前をつけさせた。

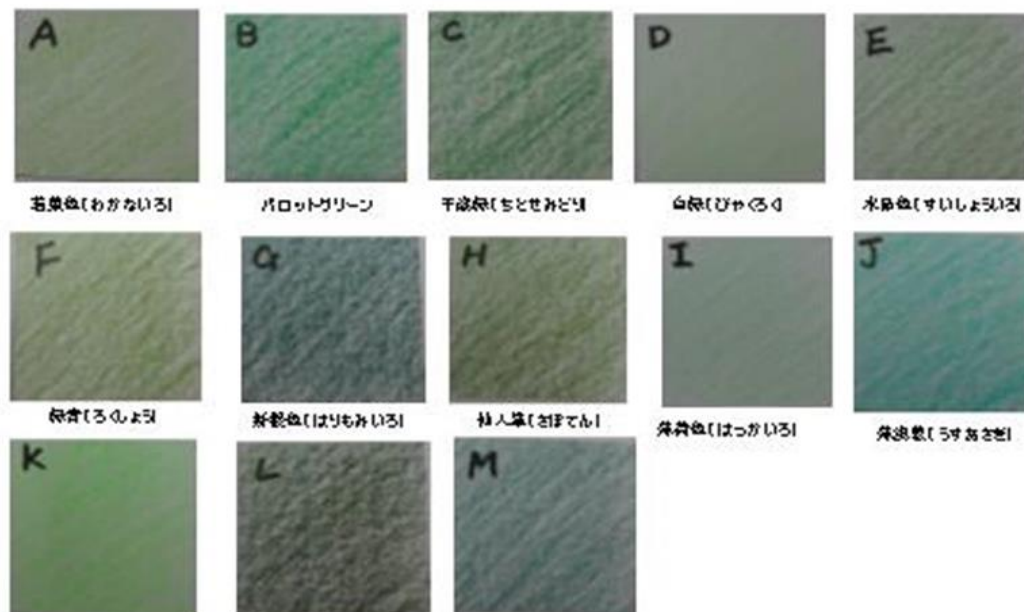


図 1 使用した色カード

色名は色辞典において付与された色名であり、参加者には示されていない

4. 予備実験 1 の結果と考察

予備実験 1 において、色名がつけられない参加者はいなかった。全員が 13 色を区別して個別の色名をつけることができていた。

結果の整理 色の名前(色名)は、基本色名の他にさまざまな名前がつけられている。JIS(日本工業規格)が 2001 年に公表した「物体色の色名」(JIS Z8102)には 269 色の色名が掲載されている。『色彩ハンドブック』によれば、色名は大きく分けて「さくら色」のような慣用色名(伝統色名・固有色名)と「ごくうすい紫みの赤」のような系統色名に分けられる(小松原, 2011)。慣用色名は動植物や鉱物、人名や地名、文学表現まで多様な起源を持ち、呼びやすく親しみやすい、イメージが持ちやすいという一方で、偏りがあり正確さに欠けるといった短所が指摘されている。系統色名は ISCC(全米色彩評議会)と NBS(米国標準局)がまとめたもので、基本色名と色相や明度、彩度を示す修飾語(うすい、紫み)を組み合わせ

せて色を表現する方法である。色名がそのまま色を示すため、色を類推しやすいという便利さがある。

色名についての上記の議論を参考に、産出された色名を表1に従い分類した。慣用色名と準慣用色名は色名辞典等を参考に著者2名で話し合っ決定した。「黄緑」は小野ら(2010)の調査で基本色と同程度の出現率であったことから基本色名に含めた。「青緑」「深緑」はJIS慣用色名にあるので慣用色とした。系統色名は、ISCC-NBSの分類名にない表現でも、色相、明度、彩度の修飾語と色名のみで表現している場合、系統色名とした。

表1 自由産出された色名の分類基準

分類名	基準	色名の例
慣用色名	植物や動物等、人物等の固有名詞を使って名づけているもの	抹茶色 オリーブグリーン
準慣用色名	慣用色と同様に動物、植物、人物等を使って名づけているが、慣用とはみなされないもの	モリゾー 汚い川の緑色
系統色名	基本色名に明暗や色相の形容詞を加えて表現したもの	暗い緑 黄色の緑
慣用+系統色名	慣用色名と系統色名が複合しているもの	濃い抹茶色
準慣用+系統式名	準慣用色名の名称に明暗や色相の形容詞が加わっているもの	明るいモリゾー
基本色名	基本色名のみで表現しているもの	緑

表1に従って分類した13色全体の分類基準別の結果を表2に示した。

慣用色名はほぼ1割に留まり、準慣用色名と系統色名で全体の7割以上を占めた。色名

表2 予備実験1の分類基準別結果

分類基準	出現数	全体に占める割合(%)
慣用色名	10	12.82
準慣用色名	32	41.03
系統色名	26	33.33
慣用+系統色名	7	8.97
準慣用+系統色名	3	3.85
基本色名	0	0.00
合計	78	

には慣用・系統という大きく分けて2種類の方法があるように、自由産出場面でも、色を示すやり方として、色のついたものにたとえるやり方と色そのものを言語化する方法の2種類がとられていることがわかる。慣用色名が少なく準慣用色名が多かったことは、美術の専門家ではないため微妙な色合いを示す慣用色名を知らないという理由も考えられるが、参

加者がイメージした多様な表現が出現したためだと考えられる。また、基本色名は出現しなかった。緑系の間接色であり、基本色名のみでは表現できないため出現しなかったと考えられる。

13色の色別に産出された色名をまとめた結果を表3に示した。同じ色につけた色名で頻出した語に関しても調べ、表3に合わせて記入した。

色Bや色Cにおいて「緑」を使っているにもかかわらず準慣用色名が多いのは「一般的な絵の具の緑」などの「緑」の形容が準慣用表現となっているためである。片山・小川(2020)の結果では、正答(色鉛筆製作者が設定した色名と色の組み合わせ)が出やすい色と出にくい色があった。正答が多い色は色A(色辞典の色名「若菜」と色D(「白緑」)であった。色Aは6人中4人が準慣用色名であり、色Dでは6人全員が系統色であった。色Dは「薄い」表現を用いた参加者が5人おり、そこから系統表現につながったとみられる。色Aは頻出語はなく、さまざまな表現がでていた。

慣用色名(エメラルドグリーン)が4人にみられた色J(色辞典の色名「薄浅葱」)は片山・小川(2020)の結果では正解者は2人しかいなかった。一方で色Jは片山・小川(2020)で誤答ではあるが「水晶色」として多くの参加者から選択される色でもあった。色名から色を

表3 予備実験1の色別結果

色番号	分類基準						合計	頻出語(出現人数)
	慣用色名	準慣用色名	系統色名	慣用+ 系統色名	準慣用+ 系統色名	基本色名		
A	1	4	1	0	0	0	6	
B	0	4	1	0	1	0	6	緑(6)
C	1	4	0	1	0	0	6	緑(3)
D	0	0	6	0	0	0	6	薄い(5)
E	0	4	0	1	1	0	6	抹茶(3)
F	1	1	1	3	0	0	6	薄い+抹茶(3)
G	0	3	3	0	0	0	6	緑(4)
H	3	2	0	1	0	0	6	抹茶(4)
I	0	3	3	0	0	0	6	薄い(2)・淡い(2)
J	4	0	2	0	0	0	6	エメラルドグリーン(4)
K	0	3	3	0	0	0	6	蛍光(2) 一番(3)
L	0	2	4	0	0	0	6	黒(2)・濃い(1)・暗い(1)
M	0	2	2	1	1	0	6	青(3)・緑(5)・紺(1)
合計	10	32	26	7	3	0		

選ばせる場合でも、色から色名を産出させる場合でも、参加者の答えが集まりやすいことから、個人間で色から同じイメージが喚起されやすい色だと考えられる。

個人別に産出した色名を調べた結果、準慣用色名を多く使う者が2人、系統色名を使う者が2人とタイプが分かれていた。ここから、個人によって色の表現方法が大きく異なる可能性が示された。

予備実験1から、非基本色であっても13色を区別し何らかの特徴をとり出して命名ができること、命名された色名は一般的な慣用色だけでなく、個人が色からイメージするさまざまな命名が行われ、命名には個人差があることが示された。

予備実験2では、教示を工夫し「自分が作った13枚の色カードの順序を見知らぬ人に再現させるために名づける」という状況を設定し、伝達場面での命名の特徴について予備実験を行った。また、色の知識による命名の違いを調べるために、美術の専門家2人にも同様の手続きで実施し、結果を比較した。

5. 予備実験2

参加者 保育者養成校に通学している女子短大生4人であり、参加者は予備調査1と重複していない。参加者の属性は予備調査1と同様であった。美術の専門家として男性教員2人が参加した。陶芸を専門としている教員と油絵を専門としている教員であった。2人とも保育者養成校において美術を教えた経験があった。

刺激 予備実験1と同様であった。

手続き 予備実験1と同様に実験に対する同意を得た後、以下の教示によって予備実験1と同様に好きな順番に並べさせた。「今から、この13枚のカードをあなたの好きな順番でこの用紙の上においてください。どのような順番でもかまいません。13枚全部を使ってください。カードに書いてあるアルファベットは色とは関係ありません。」

13枚が並べ終わったら、実験者はアルファベットがない13枚の色カードを見せながら以下の教示を行い、名づける目的を明確にした上で、名前をつけるように教示した。「今、このように並べてもらいましたが、別の人に同じ色カードを同じ順番に並べてもらいます。その際、ヒントとなるように色カードの下に名前を書いていってください。別の人を使う色カードはアルファベットも何も書いていない色だけのカードを使ってもらいますから名前が手がかりになります。どのような名前でもかまいません。自分が思いついたままを書いてください。」

参加者がすべての名前を書き終わったら「これでいいですか」と確認させ、変更がある場合は変更を許可した。

6. 予備実験2の結果と考察

結果の整理 表1に従って産出された色名を分類し、分類別、色別、個人別に集計を行った。分類基準別の結果と色別の結果を表4と5に示した。

表4 予備実験2の分類基準別結果

分類基準	出現数	全体に占める割合(%)
慣用色名	6	11.54
準慣用色名	24	46.15
系統色名	9	17.31
慣用+系統色名	3	5.77
準慣用+系統色名	8	15.38
基本色名	2	3.85
合計	52	

予備実験1と同様に個人別に産出した色名を調べた結果、準慣用色名を多く使う者が2人、系統色名を使う者が1人、準慣用色名+系統色名を使う者は1人であった。伝達を意識させた場合も、表現方法が個人間で大きく異なる可能性が示された。

分類基準別にみたところ予備実験1と2の結果は大きく変わらず、準慣用色名と系統色名が多い。予備実験2では系統色名が減り、準慣用+系統色名が増加している点、ごく少数だが基本色名が出現した点が特徴である。準慣用+系統色名は「濃い抹茶」のようにより細かい表現ができ、伝えることを意識した結果増えた可能性もある。

表5 予備実験2の色別結果

色番号	分類基準						合計	頻出語(出現人数)
	慣用色名	準慣用色名	系統色名	慣用+系統色名	準慣用+系統色名	基本色名		
A	0	2	0	0	1	1	4	黄緑(2)
B	0	1	0	0	2	1	4	緑(3)
C	0	4	0	0	0	0	4	
D	0	1	2	0	1	0	4	薄い(3)
E	0	3	1	0	0	0	4	
F	1	1	0	2	0	0	4	抹茶(3)
G	0	2	1	0	1	0	4	青(2)
H	3	0	0	0	1	0	4	抹茶(3)
I	0	2	1	0	1	0	4	
J	1	1	1	0	1	0	4	
K	0	3	1	0	0	0	4	
L	1	1	2	0	0	0	4	
M	0	3	0	1	0	0	4	
合計	6	24	9	3	8	2	52	

色別の結果においても傾向は変わらないが、頻出語が出ない傾向があった。特に予備実験1で「エメラルドグリーン」という慣用色名が頻出した色Jは予備実験2では「エメラ

ルドグリーン」の色名はなくなり、1つの色名に集中することはなかった。「抹茶」は予備実験1でも予備実験2でも頻出し、色Hは慣用色名「抹茶」と名づけられる傾向があった。色Hは、片山・小川(2020)では、誤答ではあるが「千歳緑」または「木賊色」として選ばれる傾向があった。この色も色Jと同様に個人間で同じイメージが喚起されやすい色といえる。色Jの「エメラルドグリーン」は予備実験2の伝達を意識した場面ではなくなるが、「抹茶」は予備実験1でも2でも出現することから、「抹茶」は「伝わる色名」と判断されているのだろう。

専門家2人は共に美術の専門家であったが、産出された色名は全く異なっていた。油絵を専門とする1人は慣用色名(13色中6色)と系統色名(4色)が多く準慣用色名は用いなかった。慣用色名も「わかくさ」「ビリジャン」など一般大学生が使用しない慣用色名を使っていた。陶芸を専門とする1人は準慣用色名が多く(13色中9色)、準慣用色名でも、「図工室のカッター板の深緑」や「トトロの森がもくもく大きくなる時の濃いみどり」など説明的な表現が多用されていた。同じ美術の専門家といっても専門が異なり、色名の産出に影響したかもしれない。

7. まとめと今後の課題

予備実験1と2を通じて、さまざまな中間色に色名をつけることは、成人であれば大きな困難なく実施できること、産出された色名は慣用色名と系統色名という観点から分類できることがわかった。また予備実験1では準慣用色名と系統色名が中心になり、予備実験2で系統色名がやや減り、準慣用+系統色名が増加していた。色別にみると予備実験1と同様の傾向にあり、同じように頻出する色名がみられる色がある一方で、予備実験1では頻出した色名がでない色もあった。予備実験を通じて得られた今後の課題を以下に示す。

実験手続きにおける課題 予備実験1では、特に他の人に伝えることを意識させない状況、予備実験2では伝えるという点を強調した教示を行う状況を設定したが、産出された語に大きな変化はなかった。より伝達を意識させる手続きが必要であると考え。日常生活では、受け手の知識に合わせて伝える情報や伝え方を変化させているだろう。親しい友達や年代の近い人であれば一言で済ませ、初めて会う人や自分と世代の違う人に伝える際には詳細に丁寧に伝えるであろう。予備実験2における1人の専門家はかなり詳しく説明的な表現を用いていたが、これは「分かりやすく丁寧に」表現した結果だと考えられる。予備実験2では「別の人に同じカードを同じ順番に並べてもらう」「色だけのカードを使うの

で名前が手がかりになる」と教示をしたが、産出される色名の変化を促すために、「別の人」の属性を設定し、受け手を想像させる手続きなどの工夫が必要である。

参加者の特性についての課題 予備実験 2 より、一般成人でも準慣用色名と系統色名の使用割合には個人差がみられ、専門家 2 人の間でも個人差があった。色別にみても、同じ色名が付きやすい色など刺激に差がみられる。個人差や刺激差が大きく、産出された色名にかかわる指標を調べておくことが重要だと考えられる。

色は身近にあり、一般人でも服装など色について考える機会も多い。色合いについて敏感でよく考える人もいれば、全く無頓着であったり色合わせを苦手と感じたりする人もいる。日常の色に関する感覚や意識の差が産出される色名に影響する可能性もある。参加者側の色に対する意識を反映するような質問(ファッションやメイクアップに関心がある、絵を描くのが好きなど)をあらかじめ調べたり、産出の難易度や確信度などの評定を同時に行ったりすることも検討すべきであろう。

結果の整理における課題 自由産出された色名の分類において、今回の色は中間色であり慣用色で対応できないと感じたためか、または慣用色を知らないためか「準慣用色」が多数出現した。本研究では「準慣用色」の扱いが重要になると考えられ、慣用色名と準慣用色名の区別を明確にすることが求められる。

「慣用色」の定義や種類は様々ではない。JIS(日本工業規格)は 2001 年に 269 色の「物体色の色」を決め公開しているが、他にもさまざまな慣用色名が存在している。色辞典に掲載されている色名も辞典により異なる。慣用色名の中には昔は「慣用色」として通用していた(誰でもがその事物と色を知っており、名前を出せばわかった色)が、今ではそうではない色(例えば「芝翫茶」は歌舞伎俳優の中村芝翫に由来する慣用色名であるが現代では色を想像しにくいであろう)もある。慣用色名とは認められないが、慣用色名と同じように使われる名前もあるだろう(例えば「モリゾー」は慣用色名ではないが、濃い緑色で全身を覆われた 2005 年に愛知県で開催された「愛・地球博」のキャラクターであり、今でも市民に親しまれている。モリゾーの緑は想像しやすく、愛知県民にとっては「慣用色名」といえるかもしれない)。慣用色名の調査をすすめる、慣用色名と準慣用色名の区別を明確にする作業が求められる。また、今回は「黄緑」を基本色名に、「深緑」を慣用色名としたが、「緑」に対して色味で形容をしているという意味なら「系統色名」に分類するべきかもしれない。産出された色名の分類には上記のような課題があり、今回の予備実験の結果を参考にさらに精査を進めていきたい。

引用・参考文献

- 福田邦夫 (2019). 色の名前辞典 507 主婦の友社
- 林安紀子 (2006). 乳児期における母語音声の聴覚的学習 心理学評論, 49, 64-74.
- 今井むつみ・針生悦子 (2014). 言葉をおぼえるしくみ 母語から外国語まで 筑摩書房
- 今井むつみ (1993). 外国語学習者の語彙習得における問題点—言葉の意味表象の視点から— 教育心理学研究, 41, 243-253.
- 片山 伸子・小川 徳子 (2016). 親しみやすい新奇物のカテゴリ化における話し合いの影響 研究紀要 名古屋柳城短期大学, 38, 191-198.
- 片山 伸子・小川 徳子 (2018). 児童における2者での話し合いによる新奇物分類の特徴—2年生と5年生の分類カテゴリの比較 日本発達心理学会第29回大会発表論文集, 608.
- 片山 伸子・小川 徳子 (2018). 新奇物に対するネーミングの分析に向けて 研究紀要 名古屋柳城短期大学, 40, 251-259.
- 片山 伸子・小川 徳子 (2019). 児童における2者での話し合いによる新奇物分類の特徴 (2)—1人条件と2人条件の分類カテゴリの比較 日本発達心理学会第30回大会発表論文集, 347.
- 片山伸子・小川徳子 (2020). 非基本色から想起される色の共通性について 柳城こども学研究, 3, 1-10.
- 木俣美樹男・野々村美穂・大澤由実 (2007). 雑草の地方名形成と子ども文化を再創造する「植物めいめい」プログラム 環境教育 17, 13-22.
- 小松原仁 (2011). 色名 日本色彩学会(編) 新編 色彩科学ハンドブック(pp. 263-290) 東京大学出版会
- 簗川恵理子 (2006) 商品名の命名メカニズム—家庭用電気製品「三種の神器」を例に 日本語の研究, 2, 48-63.
- 永田泰弘(編) (2002). 日本の269色 JIS規格「物体色の色名」 小学館
- 小野 文路・堀内 隆彦・富永 昌治 (2010). 現代日本人を対象とした色彩語彙の調査と分析 日本色彩学会誌, 34, 2-13.
- Roberson, D., Davidoff, J., Davies, I. R., & Shapiro, L. R. (2004) The development of color categories: A longitudinal study. *Journal of Experimental Psychology: General*, 133, 554-571.

Abstract

Pilot Studies concerning Naming for Communication:
Using Non-Basic Colors

Nobuko KATAYAMA*³ Tokuko OGAWA*⁴

Two pilot studies were conducted to identify how naming practices change in communicative situations using non-basic color names. In the first pilot study, six female junior college students asked to organize 13 color cards according to their preferred order and name each color card freely. The color names produced by the participants were divided into six categories. Participants produced various non-common color names and displayed individual differences. The participants in the second pilot study comprised four female junior college students and two male art specialists. They were asked to sort 13 color cards following the same procedure as that used in pilot study 1 and to name each color card in order for others to collate the cards in the same order. Color names used in pilot study 2 displayed the same tendencies as those in pilot study 1. However, there are differences in the two art specialists' responses. Further studies should consider the elaboration of experimental procedure, examination of the characteristics of participants and definitions of color name categories for the classification of the names participants' responses.

Key words; Color Naming, Communication, Concept

*³ Nagoya Ryujo Women's University

*⁴ Ritsumeikan University